

ずらしい品々を生母や義父の半田五右衛門や、乳母にまでことづけて送っている。彼女が洋装をして子供の1人を抱えている姿を木牌に刻ませて平戸へ送ったものは今も同地に残っている。また手紙の中で日本から「蒔絵の香盤やつげのくし」, 「本紫にそめた白ちりめん」などを送ってもらうよう依頼しているところにも日本の心を忘れないゆかしさが偲ばれる。

コルネリアの夫のクノルは1672(寛文12)年に亡くなって彼女は寡婦となったが、10年後彼女は裁判官のヤン・ビッテルと再婚した。ところがまもなくコルネリアの激情が爆発したのである。彼女は愛していた先夫の名前(Kno1. — オランダ語でかぶらの意味)にちなんで家の中の調度品にすべて美しいかぶらをデザインした紋章をつけていた。新らしい夫のビッテルはこれに気に入らず、全部それを削り取れと命じたことから口論が始まった。双方ともにゆずらず、二人のけんかは当時のバタビア上流社会の話の種だったという。コルネリアは離婚訴訟を起したがそれがきまらないうち、ビッテルは本国へ転任することになった。当時の法律ではコルネリアもこれに同行しなければならない。彼女は涙をのんで悄然とオランダ船に乗り、オランダへ向った。時に1687年である。船上でもコルネリアは先夫の子供たちと一室を占領し、ビッテルをよせつけなかったという。こうして彼女は母の国日本を再び見る機会もなく遠い北欧の土となったようだ。しかし日本人の血をまじえた女性でヨーロッパに住んだものとしてはおそらくコルネリアが最初の人ではないだろうか。

二　つ　の　旅

有　末　武　夫

その 1

昨年の11月から今年の2月にかけて、私の生活はあわただしい旅の日程に追いかけてまわされていた。高速道路の経済効果を予測するという仕事で、調査地域が南は熊本から北は盛岡にいたる広い範囲にわたり、11の地区について実態調査を必要とするものであった。連絡係というような役柄から、いやでも西に東へと飛び回らねばならない。カレンダーと調査計画をにらみ合わせながら日程を決め、時刻表を繰り予定をたてる。現地の人との都合を聞き、予定は変更される。調査対象の役所や事業所に連絡をし、切符や宿の予約をする。一つの旅行が終らないうちに次の旅行の手筈を決めなければならない。希望の切符が入手できない場合もあれば、宿が満員の場合もある。列車が遅れてこちらが予定の行動をとれないこともあれば、先方の都合で待ちぼうけをくわされることもあった。しかし広島を振り出しに、熊本・久留米・山口・三原・岡山・津山などの西日本と、盛岡・福島・新潟・宇都宮などの東日本各地を入れかわり立ちかわり回ってみて、地域による人間生活の

微妙な違いを体験し、地理を学んできた喜びを新たにした。夜行——調査——会合——旅館——調査——夜行というような苦行の繰り返しに堪えられるのも、その根源は地理を学ぶ喜びにあるのかも知れない。

その 2

家内の学生時代は戦時中で、修学旅行は伊勢参りだけだったとか。結婚して十数年、私は学会や巡検や調査で方々へ出歩くが、家内はまだ京都・奈良を知らなかった。子供達がどうやら留守番ができるようになったので、夫婦だけで京都・奈良見物に行こうということになった。調査の報告書もまとまり、一段落となったる月下旬、私たちは旅そのものを楽しむことだけを目的として出発した。行先はお定まりの観光コース、折からの観光シーズンとあってどこも行楽客でいっぱい。しかしいつも何か目新しい現象はないか、報告書に取り入れられるような事柄はないか、地域性を感得できないだろうか、というような一種の職業意識にとりつかれながら旅行している私にとって、春の陽光がうらうらとさす大和路をバスにゆられて行くことが何ともいえない楽しさを与えてくれた。そして東大寺・興福寺から法隆寺や薬師寺などを回っている間に、予習も復習もしなくてよいという気安さから、案外すなおに昔の人の残した建物や仏像を眺めていた自分に気がついた。それとともにいつか高速道路の工事現場で、巨大なかたつむりのようなインターチェンジの構造を説明してくれた若い技師の顔が思い出され、機械をのぞきながら五重塔の建設を指図しているような錯覚におちいった。創造に対する人間の尊い努力が、無心の旅の中で私の心に何かをささやいたのかも知れない。

近 況 報 告

岡 崎 セ ヅ 子

本年度から地図学の講義を担当していますので、地理学に密接な関係をもつ地図に早くから慣れ、親しみ、かつ大いに活用していくことのできるようにとの願いをこめて話をしています。地理学科の学生の場合は例年のとおり2年生になると地図学演習でしっかり訓練されるわけですが。

論文の方では、「日本各地の山地内における侵蝕平坦面の分布とその成因に対する考察」を本学の人文科学紀要第20巻に、又、「立川段丘西端部のローム層の厚さの分布とその堆積状態」を地理学評論<4月号>に発表し、各々数年来の仕事が一段落ついたところです。侵蝕平坦面の問題は今後なすべきことが多くありますので続けて研究したいと考えています。ロームの方は、卒論以来気にかかっていた問題に一応結着をつけたわけですが、他の地域でも地表面の微起伏とロームの厚さなどとの関連についての研究が進められることを期待している次第です。

最近、4月の学会で発表した「先志摩の地形」に次いで、三陸海岸・伊豆半島の海岸などの地形について調べています。陸中海岸には昨年の夏、久慈地方(山崎さんの卒論のフィールド)に行った時には寒い位でしたので、今年の夏も能率が上がるだろうと考えています。